

『朝鮮太平記』と『伽婢子』の挿絵の類似性

朴 贊 基

『朝鮮太平記』（近藤清信画、1713年刊？、早稲田大学図書館蔵）は、奥書に「右朝鮮太平記者日本の士将大明迄も切靡為一統之記一字一点無誤全部七冊に書拔者也」とあるように、従来の豊臣秀吉の朝鮮侵略をテーマとする『太閤記』（小瀬甫庵、1625年自序）を始めとする「太閤記物」の系譜を受け継いでいる。これについては既に若月保治氏による指摘がある。

しかし、『朝鮮太平記』は、従来の「太閤記物」の踏襲ばかりでなく、『伽婢子』（浅井了意、1666年刊）の六話の怪異談及び異郷訪問談を絢交ぜることによって新しい脚色の変貌をはかったのである。

本発表では、まず『朝鮮太平記』と『伽婢子』に描かれた挿絵を中心とし、その類似性を探ることによって両作品の影響関係を明らかにし、これらについての考察を行ってみたい。

さらに、『朝鮮太平記』七之巻には作品の筋の展開となんら関係のないような、朝鮮通信使行列及び「馬上才」の挿画が嵌め込まれている。また、作品の構成上においても、一之巻から六之巻までは各巻六段に構成されているが、七之巻だけが一、二、三、五段の四段構成になっている。つまり、朝鮮通信使行列の絵を挿入することによって、他の巻との構成上のずれが生じている。これをどう説明すべきか。また、朝鮮通信使行列の絵の挿入はどのような意味をもつのかについても若干ふれてみたい。

最後に、『朝鮮太平記』の読本浄瑠璃としての性格と特色を検討し、その書誌的事項についても言及したい。

1. 『朝鮮太平記』と『伽婢子』

若月保治氏は『朝鮮太平記』の典拠について、「いうまでもなく『太閤記』によったものである」^①と指摘している。確かに『朝鮮太平記』は、『太閤記』巻十三から巻十五までの豊臣秀吉の朝鮮侵略出兵（韓国では壬辰倭乱・丁酉再乱と呼ぶ）の戦記とその顛末がダイジェスト化されたものである^②。しかし、『朝鮮太平記』には『太閤記』を始めとする「太閤記物」には見られない、次の2つの要素が付加えられている。

一、怪異談及び異郷訪問談

一、朝鮮通信使行列の描写

では、ここで『朝鮮太平記』に描かれた怪異談及び異郷訪問談についての考察を行ってみる。具体的に、『朝鮮太平記』二之巻第二「小西が兵松永太郎右衛門滄浪国へ至る事并仙境に逢事」のストーリーと挿絵を引用する。

北風さそいて南をさして吹付しに、夜昼の境なく、一つの嶋に流よる。太郎右衛門は生たる心地もなく、先岸に上りて見るに、岩石そばたち、青きはこはく瑠璃の如く、白きはあわ雪の如し。又黄なるは粟に似て、赤きは紅の花に似たり。日本の地にてついに見ざる所也。草木の有様そのしなたとえがたし。磯端へ出たる人を見るに、頭には薄物の帽子をかづき、身にはもろもろの草木織り付たるひたたれに花形付たるくつをはきたり。白くまゆげ高くかねくろふ付て、かたちは唐人のごとく、物いひは日本のことば也。松永を見ていか成ものぞとふ。松永有のままにかたりて国をとへば、滄浪国といて日本よりは南の方三千里に及べり。是より観音の浄土ふたらくせかいかも程近し。（翻字及び句読点等は筆者による。以下同じ）

小西行長の郎等松永太郎右衛門が隊列から離脱され狼狽えていたところ、船を発見する。船に乗った太郎右衛門が風に押されて着いたところが、朝鮮でも、日本でもない滄浪国であったという異郷訪問談である。それが挿絵（図1）の

右側に描かれている。

このようなストーリーは『伽婢子』巻之六・1「伊勢兵庫仙境に到る」にも類似するものがある。

兵庫頭は吹はなされて南をさしてゆく。夜るひるのさかひもなく、十日ばかり行ければ風すこし吹よはり、ひとつの嶋にながれよりたり。岸にあがりてみれば、岩石そばだちてあをきは碧瑠璃のごとく、白きは珂雪のごとく、黄なるは蒸粟に似て、赤きは紅藍花に似たり。其外種種の奇石、日本の地にしてはいまだ見ざる所也。草木のありさま、又めなれざる花咲、このみ結べり。あやしき人いそちかく出たるをみれば、かしらに羅のぼうしをかづき、身にはもろもろの草木をりつけたるひたたれに、花形つけたるくつをはきたり。年のころ二十ばかりなるが、色はなはだしろく、まみけだかく、鉄漿くろうつけて、かたちはもろこし人に似て、物いひは日本のことばに通ず。

兵庫頭を見て大にあやしみ、いかなるものぞと問ければ、兵庫ありのままにかたる。此人いふやう、ここをば滄浪の国と名づく。日本の地よりは南のかた三千里に及べり。

北条氏康の部下伊勢兵庫頭は、氏康の命令に従い、八丈ヶ嶋を見て帰るといつて船にのるが、強風のため漂着したところが滄浪国であったという設定である。この話は、人名、地名などの相違はあるものの、『朝鮮太平記』と同様、滄浪国という異郷を訪問する趣向である。また、引用した例文のように、滄浪国での描写も類似する点が多く、その影響関係が考えられる。さらに、挿絵の描写においても『朝鮮太平記』二之巻第二「小西が兵松永太郎右衛門滄浪国へ至る事并仙境に逢事」の挿絵（図1）は、小西行長の家来松永太郎右衛門が滄浪国に漂着した折の描写で、日本では見られない薄物の帽子をかぶった男性の姿や草花を髪につけた女性の姿等、異国情緒を表す描写になっている。これは、『伽婢子』巻之六・1「伊勢兵庫仙境に到る」の挿絵（図1' a、b）を合成した構図にも類似する描写になっていて、その影響関係が考えられる。

その他に、『朝鮮太平記』二之卷第五「清正郎等安田助之丞頓死の事并一夜不思議を見る事」の描写も『伽婢子』と類似するところがある。以下、その一部を引用する。

その、ち清正の郎等に安田介の丞といふもの武勇世に高ふして、清正の片腕は此人にととめたり。つねに神仏をうやまい後世を願ふ心ざしあさからず。観音普門品弥陀経一卷念仏百返を毎日いくさ中ばにても心にかけてつとめをなす。すでに清正軍慮に働け共、兵の勢いつきければ力なく城をあけてぞのき給ふ。助之丞も力なくむかふよせ手に切かかり、ついに大軍の中をきりぬけてきんさんしの山の奥に落ち行ける。かくて日もくれければ何方へ出べき道をしらず。かた原をみればひとつのわらや有。谷かげに立ながら内のていをのぞきみるに人なし。幸いと此家に入隠れたりければ、唐軍二十騎斗の音としてまさしくしろかげは見へしぞ。さだめてりやうしうせんにかかりて落行けんといふを聞は、我を討んとの追手也。され共此家にはめもかけず遠ざかり行所に又人の声聞へしかば、ひそかに窓よりのぞきみれば、一人女年四十斗成がせいほそく手にうつくしき袋を持、助之丞様は爰におはすやといへ共、助之丞物をもいわずかがみいたり。女打笑、何を恐れ給ふぞ。少も恐れ給ふな。我は是当国くりもと郡におはします雪白宮の御使也。君を心安くしづめさせんとてつかはされたり。ゆめゆめうたがい給ふな。君つねにじひふかく神仏をうやまい給ふ、心をかんにて雪白の明神守り給ふ也とて、持たる袋のおをときやきもちを取出して、ちいさきかめに酒を入てのみくはせたり。

ここで、話の筋を簡単にまとめると、「加藤清正の軍は陣取った城をあけて敗退する。ここに、加藤清正の家臣安田助之丞なるものが逃道をも知らず、狼狽していたところ一軒の藁屋を発見する。幸いと思いそこに身を隠す。隠れている藁屋を後方からの追手が過ぎ去り、自ら雪白宮の使という一人の女性が訪れる。彼女は怪異の出現を予告し、安田助之丞を安心させる。ついで現れた怪異は追手を皆殺し、助之丞が本陣に戻るように助ける」といった展開である。

それは、普段から雪白明神を信仰した信心によるものだとする作者の教訓的創作意図が読取れるのであるが、これは『伽婢子』巻之七・7「雪白明神」にも重複する話がある。具体的には、以下の如くである。

高頼が郎等堅田又五郎といふは、武勇ありて力量人にすぐれ、しかも常に神仏をうやまひ、後世をねがふ心ざしあさからず。観音普門品一返・弥陀経一卷・念仏百返をもつて毎日の所作とす。

すでに大将高頼城を落ければ、又五郎も力なく、むかふ寄手に切かかり、つるに大軍の中を切ぬけて、安養寺山のおくに落行たり。かくて日暮たりければ、いつかたに出べき道もしらず。谷かげに立ながら内には人なし。まづ此家にかくれ居たれば、軍兵二十騎ばかりの音して、まさしく後かげはみえしぞ。さだめて伊賀路にかかりて落ゆきけむといふをきけば、我を討とめんとする追手の兵也。されともかくれ居たる家には目もかけず、やうやう遠ざかりゆく。

今は心やすしと思ふ処に、又人の打過る音のきこえしかば、ひそかに窓よりのぞきみれば、ひとりの女房、そのよはひ四十ばかりなるが、勢ほそく高し。褐色の中なれたる小袖着て、手にうつくしき袋をもちて、堅田又五郎殿はここにおはするやといふに、又五郎物をもいわず忍び居たり。女房うちわらひて、何をかおそれて忍び給ふぞ。すこしもくるしき事なし。我はこれ当国栗太郡におはします、雪白の宮の御使として、君が心をやすくせむとてつかはされたり。ゆめゆめうたがひ給ふな。

『博異志』の「馬侍中」を出典とする、この怪異談は足利義尚の江州六角高頼攻めに転用された話である。高頼の郎等堅田又五郎というものは武勇がすぐれ、しかも普段から神仏を敬い、念仏を唱えることをおろそかにしなかったという設定や城が落ちて藁屋に逃げ隠れる話、雪白宮の使が現れ、怪異の出現を予告するなど、既に述べた『朝鮮太平記』二之巻第五「清正郎等安田助之丞頓死の事并一夜不思議を見る事」と殆んど重なっている。更に、挿絵の描写、即ち藁屋に隠れている安田助之丞の描写や雪白宮の使と助之丞を追う追手の姿、

雪白宮の使の予告通り現れた怪異が追手を食い殺す等（図2）は、『伽婢子』卷之七・7「雪白明神」の描写（図2'）と類似していることから、2つの作品の影響関係が認められるのである。

他にも、『朝鮮太平記』四之卷第二「小西撰津守三道に陣を張事并家来妻木弥七隠里に至る事」の話と挿絵（図3）は、『伽婢子』卷之十一・1「隠里」（図3'）を利用しており、さらに『朝鮮太平記』四之卷第四「沈惟敬発心之事并幽霊に出逢事」（図4）、五之卷「太閤の家来岩間軍太が事并ぐん太生取る事」、第五「軍太妻にこがれ死せし事并幽霊と成る事」（図6）の話と挿絵は、各々『伽婢子』卷之八・4「幽霊出て僧にまみゆ」（図4'）、卷之十二・2「幽霊書を父母につかはす」（図6'）から影響されたものと確認される。ただし、五之卷第二「花岡忠次が女房の事并しんくの撃帯の事」においては、文は卷之二・2「真紅撃帯」から影響されたものの、挿絵の描写（図5）は卷之三・3「牡丹灯笼」（図5'）から影響されたものと考えられる。

では、以下『伽婢子』の出典及び『朝鮮太平記』との影響関係を比較すると、次の如くである。

朝鮮太平記（1713?）	伽婢子（1666）	中国の出典	日本の出典
二之卷第二 小西が兵松永太郎右衛門滄浪国へ至る事并仙境に逢事	卷之六・1 伊勢兵庫仙境に到る	一処士元藏幾自言云々（『杜陽雜編』）	『北条五代記』五
二之卷第五 清正郎等安田助之丞頓死の事并一夜に不思議を見る事	卷之七・7 雪白明神	馬侍中（『博異志』）	
四之卷第二 小西撰津守三道に陣を張事并家来妻木弥七隠里に至る事	卷之十一・1 隠里	申陽洞記（『剪灯新話』三）	
四之卷第四 沈惟敬発心之事并幽霊に出逢事	卷之八・4 幽霊出て僧にまみゆ		「曾呂利物語」二「行の達したる僧には必ずしるし有事」等
五之卷第二 花岡忠次が女房の事并しんくの撃帯の事	卷之二・2 真紅撃帯（挿絵は卷之三・3 牡丹灯笼を利用する）	金鳳釵記（『剪灯新話』）	『將軍記』（織田信長）『信長公記』
五之卷第四 太閤の家来岩間軍太が事并ぐん太生取る事	卷之十二・2 幽霊書を父母につかはす	翠翠伝（『剪灯新話』三）	『信長公記』四一十三
五之卷第五 軍太妻にこがれ死せし事并幽霊と成る事			

（『朝鮮太平記』を中心とし、その影響関係が認められる部分だけを比較した）

以上のように、『朝鮮太平記』は、若月保治氏の指摘通り、「太閤記物」の系統を受継ぎながら、『伽婢子』から六話の怪異談・異郷訪問談を受入れることによって新しい脚色の変貌をはかったのである。

しかし、『朝鮮太平記』の作者は典拠からあまりにも忠実に話の筋を受入れたせいか、ストーリー展開上において一つのミスを犯してしまった。その具体的な例として、『朝鮮太平記』五之巻第四「太閤の家来岩間軍太が事并ぐん太生取事」の一部を引用する。

其後太閤の家来岩間軍太といふ物有。(中略)其所に嶋ぶち定右衛門と云者一人の娘有しに其名をもなかと云てかほかちいふ斗なく、(中略)次の日、くるめぐん太に手を出やと問。本山寺に住候へば、歌物〇は人なみにて候と申、くるめ悦びかかへんとて二百貫に定らる。ぐん太は仰にしたがうべし、と云けれ共つまの行へを尋しゆへ忍び泪せきあへず。卯月の衣がへになりければ、軍太はあかつきたる小袖をぬぎ、妹が方へやりたべと一首を書いてゑりにぬい〇送りける。色見へぬ是や忍ぶのすり衣思ひみだるる袖の白露と書送れば、たつこは是を見るよりも外思ひの涙にむせ給ふ。

太閤の家来岩間軍太は嶋淵定右衛門の娘もなかといいなすけであった。二人は結婚するが、戦争によって離ればなれになる。妻もなかを探して歩きまわる軍太はもなかが敵将くるめの妾になったという噂を聞く。もなかに会いたい一念でくるめの陣を訪れた軍太は、もなかは妹だと嘘をいい、面会を頼む。しかし、くるめの寵愛をうけているもなかのことだから、外部との接触はありえないと拒まれる。軍太は悲しみのあまり着ていた小袖を脱ぎ、恋文を書いて送る。という筋であるが、ここに、突然「たつこは是を見るより」という詞が嵌込まれる。つまり、小袖の恋文を受取るのは「たつこ」ではなく、「もなか」であるべきなのだ。ではなぜ、突然「たつこ」が登場するのであろうか。これは、『伽婢子』巻之十二・2「幽霊書を父母につかはす」の一文と比較すると解決できる。

江州東坂本に正木のながしがむすめ、龍子は、いとけなくして才智有

り、(中略) 其隣に芦崎なながしが子に、数馬といふものは、龍子とおなじ年にて、いとけなき時はひとつ所にあそびけるを、時の人みなたはふれて、此おなじ年なる子は、後かならず夫婦となすべしを、(中略) 卯月の衣がへになりければ、垢づきたる小袖をぬぎて、人にたのみて妹につかはすといはせ、歌一首かきて衣裏につつみたり。

色見えぬこれやしのぶのすりごろも思ひみだる袖のしら露^③

龍子、これをとりにて、衣裏のほころびをひろげしかば、歌あり、大にかなしくて、声を忍びの泪をさへがたく

織田信長の家臣佐久間信盛の寵愛を受けるようになった妻龍子が、行方をつきとめた夫数馬の文を受取った場面である。さきの「軍太・もなか」の夫婦関係が、ここでは「数馬・龍子」と名前が替っている。従って、前掲の「たつこは是を見るより」の「たつこ」は、正しくは「もなか」になるべきである。『朝鮮太平記』の作者は典拠である『伽婢子』の筋を忠実に受入れたため、ここに一つのミスを犯してしまったのであろう。

2. 朝鮮通信使行列の挿画

『朝鮮太平記』七之巻には作品の筋の展開とはなんら関係のない朝鮮通信使行列及び「馬上才」の挿画(図7～10)が嵌め込まれている。また、作品の構成上においても、一之巻から六之巻までは各巻六段九丁四図(一図は一丁)の構成になっているが、七之巻だけが一、二、三、五の四段構成で九丁五図になっている。つまり、朝鮮通信使行列の絵を挿入することによって、他の巻との構成上のずれが生じている。以下、構成上の違いを明らかにし、その意味合いを考察するため『朝鮮太平記』の目次を記す。

朝鮮太平記一之巻 秀吉朝鮮の案内を乞事

秀次天下の職にそなはること 第壹

太閤琉球へ内談之事并朝鮮征伐思立之事 第貳

- 秀吉朝鮮国へ向ひ給ふ事并諸軍勢番船に取らるる事 第三
- 日本勢釜山海の城を取事并朝鮮大王城を落す事 第四
- 加藤清正二王子を生取事并印判にて合助事 第五
- 日本之軍勢朝鮮へ攻入事并和睦をねがふ事 第六
- 朝鮮太平記二之巻 小西撰津守のな○の城を戻退の事 第一
- 小西が兵松永太郎右衛門滄浪国へ至る事并仙境に逢事 第三
- 柳川侍従打散さるる事并三大将王城へにげ入事 第三
- 朝鮮軍立之事并小早川老氣之働事 第四
- 清正郎等安田助之丞頓死の事并一夜不思議を見る事 第五
- 朝鮮の勢しん州取入事并七人之大将利を失事 第六
- 朝鮮太平記三之巻 太閤御○奥行之事 第一
- 小西撰津守二王子の事并清正和義を被事 第二
- 太閤なこやより大坂へ御上りの事并百物語の事 第三
- 関白秀次奢之事并秀頼誕生之事 第四
- 朝鮮大明の両使に李宗城行事并沈惟敬使者を集事 第五
- 太閤伏見にて大明の両使を御相見有事并安田○○○ 第六
- 朝鮮太平記四之巻 清正家来有間新蔵愁ひの事 第一
- 小西撰津守三道に陣を張事并家来妻木弥七隠里に至る事 第三
- 大明勢軍立之事并宇喜多秀家船中之不思議之事 第三
- 沈惟敬発心之事并幽霊に出逢事 第四
- 沈惟敬日本へ引入事并揚元惟敬を生取事 第五
- 小西行長南京に夜向之事并揚元責落さるる事 第六
- 朝鮮太平記五之巻 朝鮮国王二所の城渡事 第一
- 花岡忠次が女房の事并しんくの撃帯の事 第三
- 朝鮮の勢後藤が勢を討取事并大明の勢○事 第三
- 太閤の家来岩間軍太が事并くん太生取る事 第四
- 軍太妻にこがれ死せし事并幽霊と成事 第五

- 大明の勢朝せんにかせいせし事并大明助軍の事 第六
- 朝鮮太平記六之巻 朝せんのせいうるふさんをせめる事 第一
- 小西ふさんの城を取る事并大明の大王病に伏事 第二
- 大明朝せん和義を乞事并唐人共丸山へ行事 第三
- 唐人共丸山通ひの事并大明勢一座の大よせの事 第四
- 李如松和国入わ成る之事并生捕る事 第五
- 清正館につかれる事并清正和睦之事 第六
- 朝鮮太平記七之巻 嶋津又七郎手柄事并新景の城軍の事 第一
- 太閤せいきよの事并嶋津義ひろ勢手柄の事 第二
- 清正和談を取かはす事并小西打散さる事 第三
- 朝せん人來朝之事并所領を給る事 第四

つまり、『朝鮮太平記』七之巻における挿絵は、本作品のストーリーとはなんら筋の関係が認められないにもかかわらず、朝鮮通信使行列及び江戸城で行われた「馬上才」の描写が挿入されている。これは『朝鮮太平記』が何らかの形で朝鮮通信使との関わりをもっているということであろう。

では、ここで『朝鮮太平記』の刊行年度を考えてみよう。若月保治氏は『朝鮮太平記』の刊年を正徳三年（1713）と推定している。これに従えば、第八回目の朝鮮使節の訪日が正徳元年（1711）であったから、二年後の正月に刊行されたということになる。

さらに、注目されるのは『朝鮮太平記』の画作者近藤清信があげられる。近藤清信は江戸中期、特に正徳・享保頃活躍した浮世絵師で、筆海堂と号した人である。『日本大人名辞典』に「正徳元年の朝鮮人入貢の事実を扱ったと思はれる絵に、唐人行列之絵図及び唐人三使之行列などがあり、日本画工の肩書を用ひている。」と記すように、『朝鮮太平記』の画作者近藤清信の絵は朝鮮通信使との関連性が認められるのであり、画作者の創作意図が『朝鮮太平記』の挿絵に生かされているものであれば、朝鮮通信使行列の挿絵の描写は説明される

のではあるまいか。

日本の近世期における朝鮮と日本の国交は、1592年豊臣秀吉の朝鮮侵略によって中断されたが、その後対馬の宗氏の尽力によって、1607年に回復することができた。以後、朝鮮通信使の訪日は、最初の1607年を合わせて12回行われたのである。この国交修復の一環として朝鮮使節の訪日が行われたのであり、その間にはさまざまな事件及び両国の文化・芸能・詩文贈答等の多方面での交流が行われたのである。

朝鮮通信使との交流は、日本の一般民衆においては大きな関心の対象であって、ただ異国人に接するという次元のものではなく、文化や学術的交流を通して異国の文物に接しようとする強い願望によるものであったと思う。従って、朝鮮通信使の旅先での交流は自然発生的におこなわれたのであり、朝鮮通信使が果たした役割として注目されるのは、もちろん政治的な役割もあったものの、それよりはむしろ文化的・学術的交流の方に関心が引かれるのである。

それが具体的な形で現れたのが『朝鮮太平記』七之巻の挿絵なのであろう。『朝鮮太平記』七之巻に見る朝鮮通信使行列の挿絵は、1711年第八回目の朝鮮使節訪日の行列及び馬上才の様子が描写されている。第八回目の訪日に関する日本側の記録としては『朝鮮人行列』、『朝鮮人来聘覚書』があり、朝鮮側の記録も『東槎日記』、『東槎録』等が残っていて、当時の行列の様子の詳細が推察される。

1711年の朝鮮使節は、徳川家宣の襲職を祝うための使節として、正使趙泰億、副使任守幹、従事官李邦彦を始め、製述官、書記、学者、医者、画家、書家等の高級官吏と彼らに随行する清道旗、形名旗の武官、その他に楽隊や芸能を担当する童子の下官等にわかれており、その規模は500人であった。

このような雰囲気を取入れて『朝鮮太平記』が刊行されたとすれば、七之巻の挿絵の描写は説明されるのではあるまいか。

3. 『朝鮮太平記』の特色

『国書総目録』によれば、『朝鮮太平記』は浄瑠璃として分類されているものの、『義太夫年表』及び『近世邦楽年表』による上演記録が見当たらない。これは『朝鮮太平記』及び類似の古浄瑠璃の研究において大きな意味を与えていると思う。これについて、若月保治氏は次のように述べている。

元来『十二段草子』其物からが、最初は読物であり、見る本であって、決して作成の第一歩から語物であったのではないから、其以後に語物に用ひられた舞曲や、戦記物語や、新作の浄瑠璃などが、他面に於て読物でもあり、又絵入の見る本でもあったことは自然の勢でなければならぬ。されば浄瑠璃の初期に於てはその読物でもあり、見る本でもあることの意義の方が、寧ろ主勢力となつて、寛永正保頃に於ける正本は皆絵入本であり、而も其絵に丹緑の彩色まで施したものが普通であり、そこには曲節付や墨譜の如きは殆ど全く之を見ることが出来ないのであった。

つまり、初期の古浄瑠璃は読物、見る本であつて、曲節付のない絵入本の読本浄瑠璃であつたということである。『朝鮮太平記』もこれに当たるもので、一つの読本浄瑠璃作品である。

ちなみに『朝鮮太平記』は、世にあまり知られていない作品なので、ここにその書誌的事項を記す。

早稲田大学図書館所蔵本（へ／7／1225）

体裁：中本、七卷一冊、18.2×13.1センチ

表紙：朱黄色に二重七角形と二重四角形を組み合わせた紋様が押される。

題籤：後のもの。「朝鮮太平記」

内題：「朝鮮太平記 一之巻」

版心：「朝鮮一～七」

本文匡郭：16.1×12センチ。

丁数：各巻九丁、七巻六十三丁。

丁付：各巻「一～六、七之十、十一、十二」

挿画：1、2、3、4、5、6巻 各4画4丁、7巻 5画5丁。

本文：各半丁16行。

刊記：なし。若月保治氏が『古浄瑠璃の研究』（第3）「朝鮮太平記」の解説で、「『絵入浄瑠璃六段本外題目録』には之を正徳三年刊としている。暫く之に従ふ」とする。

画作者：三之巻第一の挿画の右及び東京大学図書館霞亭文庫所蔵本の表紙に「朝鮮太平記 筆海堂 近藤清信画」と記す。

東京大学図書館霞亭文庫所蔵本（以下東大本と称す）は、上記の作品と同版である。ただ、東大本は一之巻が欠巻である。

では、この読本浄瑠璃はいつ頃から刊行されたのであり、その特色は何であ

作品名	作者	刊年	板元	巻数
義経記	未詳	元禄二年正月	鱗形屋	7巻
曾我物語	未詳	同五年正月	鶴屋、村田屋	7巻
平家物語	未詳	同七年正月	鱗形屋	7巻
楠軍記	未詳	同九年正月	鱗形屋孫三郎	7巻
北条五代記	未詳	同十年正月	同上	7巻
鎌倉北条九代記	未詳	同十二年正月	藤田忠兵衛	7巻
東鑑三代將軍	未詳	同十六年正月	鱗形屋	7巻
保元軍物語	未詳	元禄頃？	鱗形屋	7巻
前太平記	未詳	宝永二年正月	大伝馬町、九左衛門	7巻
出世太平記	未詳	同四年正月	井筒屋三右衛門	7巻
甲陽軍鑑	未詳	同五年正月	喜右衛門	7巻
太閤軍記	近藤清春	同七年正月	山形屋	7巻
太閤記	近藤清春	同七年正月	鱗形屋	7巻
絵入太平記	未詳	同七年正月	喜右衛門	7巻
後太平記	未詳	同八年正月	同上	7巻
曾我物語	未詳	正徳二年正月	西村屋	7巻
朝鮮太平記	近藤清信	同三年	不明	7巻
織田軍記	未詳	同四年正月	西村屋	7巻
出世太平記	未詳	同五年正月	鱗形屋孫兵衛	？
秀平五代記	未詳	同六年正月	鶴屋	？
島原軍記	未詳	享保三年正月	山本九左衛門	7巻
西国太平記	未詳	同三年正月	西村屋	7巻
曾我物語	未詳	同五年正月	鱗形屋	7巻
本朝三国志	羽川珍重沖信	同五年正月	鶴屋	？
本朝三国志	未詳	同六年正月	喜右衛門	4巻
新田四天王	未詳	同七年正月	村田屋	？
西海軍記	未詳	同八年正月	喜右衛門	？

（『国書総目録』、『古浄瑠璃の研究』を中心に作成し、それに管見に及んだ作品を付加えた）

ろうか。まず、管見に及んだ読本浄瑠璃を年代順に記すと、以下の如くである。

この表から指摘できるのは、次のいくつかの共通点である。

1. いずれも軍記物であり、先行の軍記物語を抜き取った読本浄瑠璃である。
2. 古浄瑠璃の時期に江戸で刊行された読物、見る本で、殆ど正月に刊行された。
3. 七巻本で、半丁十六行で構成されている。

以上のような、読本浄瑠璃としての特徴が読取れるのであり、また若月保治氏の「浄瑠璃を語り、或は稽古する専門家用を目的の正本と、唯浄瑠璃を読んで楽しむ一般読者を目的とする正本と二種類の本が出来ることとなり、それが殆ど別々の無関係の発達を見ることになった」という指摘からは、さらに示唆するところがある。つまり、江戸時代の浄瑠璃は従来のものであるため、読むための絵入正本と、浄瑠璃を語る稽古用の曲節付けの正本が、各々の道を進んでいったということであり、『朝鮮太平記』は前者で、先行の『太閤記』を始めとする「太閤記物」の系譜を受継いでいる読本浄瑠璃の性格を有しているということになる。

しかし、『朝鮮太平記』は従来読本浄瑠璃が一貫していた素材を軍記物から一部取入れながらも、既に確認した『伽婢子』の怪異談・異郷訪問談を取入れ、両作品の要素を交ぜることによって新しい脚色の変貌をはかったのである。さらに、『朝鮮太平記』の挿絵の描写(図11~13)は、「軍記物」から「仮名草子」へ、また「仮名草子」から「草双紙」へと変化していく過程を垣間見ることのできる一つの作品として意味があるのではあるまいか。

【注】

- ①若月保治『古浄瑠璃の研究』2、桜井書店、1944。
- ②『朝鮮太平記』の目次参照。
- ③『宝治御百首』3120番、実氏の歌を取っている。

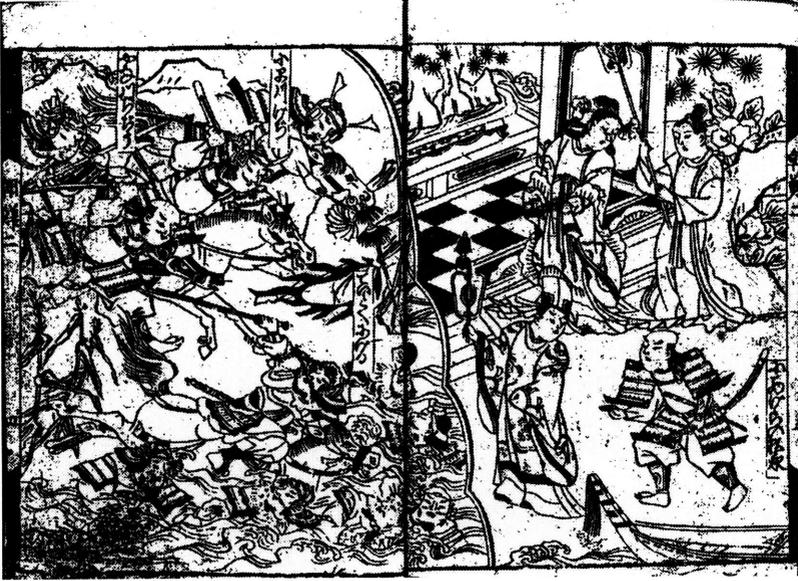


図1 『朝鮮太平記』二之卷第二「小西が兵松永太郎右衛門滄浪国へ至事#仙境に逢事」



図1' a (左) b (右) 『伽婢子』卷之六・1「伊勢兵庫仙境に至る」



図2 『朝鮮太平記』二之巻第五「清正郎等安田助之丞頓死の事并一夜に不思議を見る」

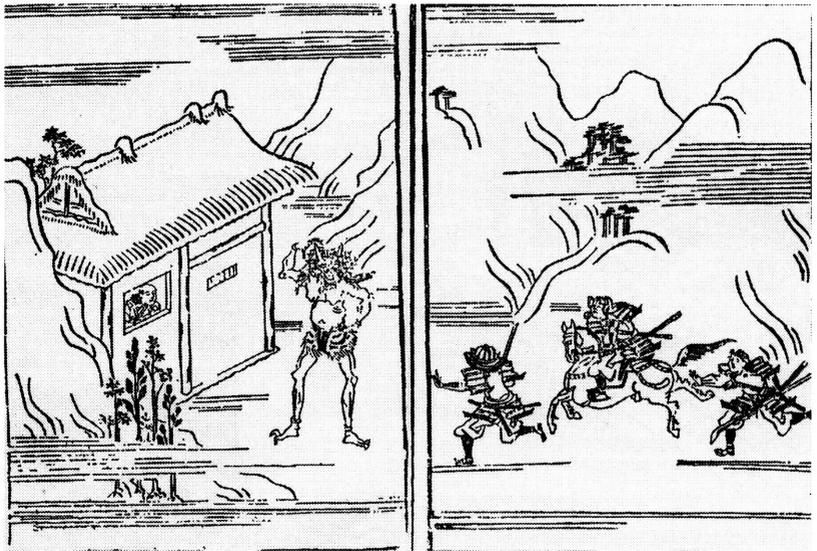


図2' 『伽婢子』巻之七・7「雪白明神」

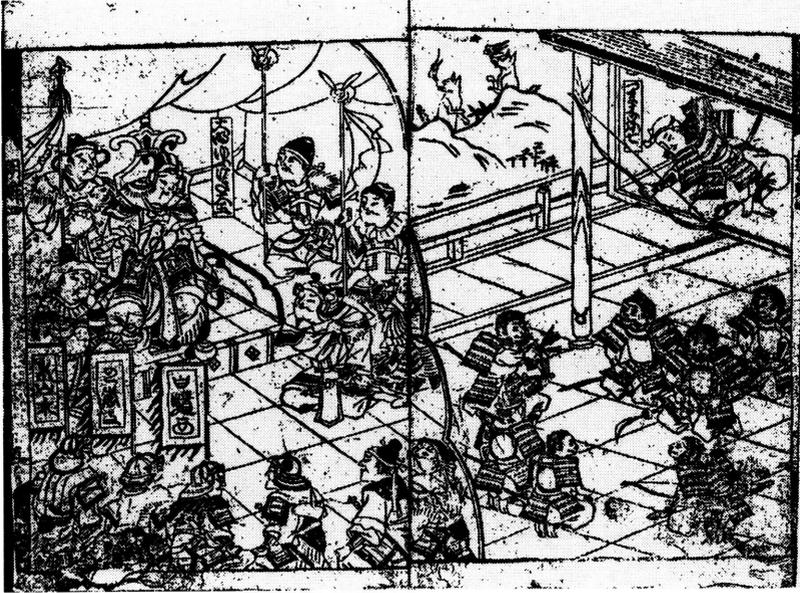


図3 『朝鮮太平記』四之卷第二「小西撰津守三道に陣を張事并家来妻木弥七隠里に至る事」

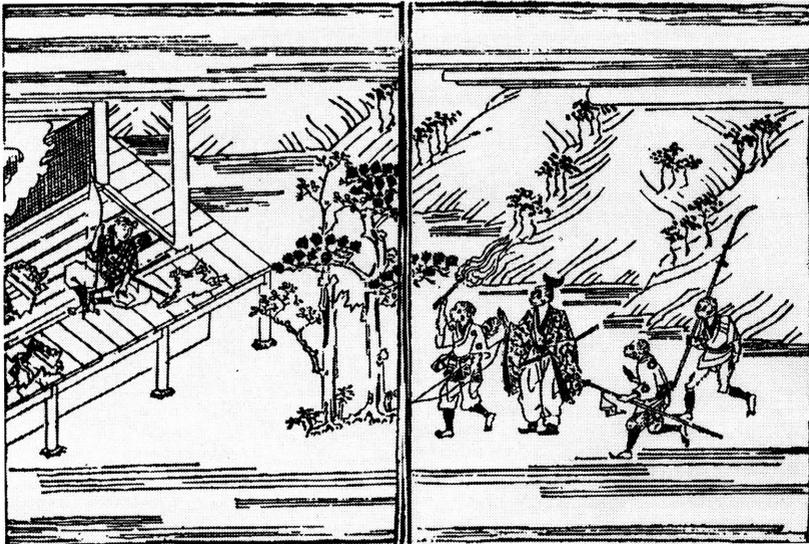


図3' 『伽婢子』卷之十一・1「隠里」

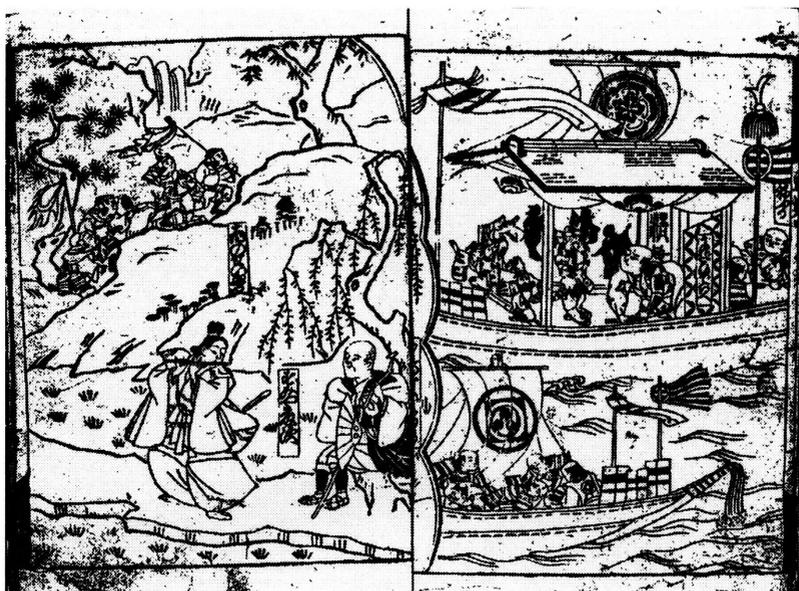


図4 『朝鮮太平記』四之卷第四「沈惟敬発心之事#幽霊に出逢事」

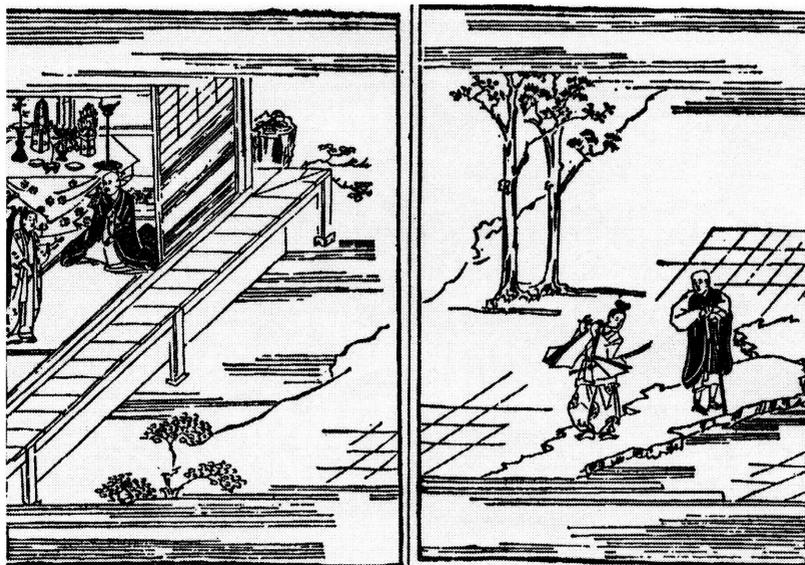


図4' 『伽婢子』卷之八・4「幽霊出て僧にまみゆ」



図5 五之卷第二「花岡忠次が女房の事并しんくの撃帯の事」



図5' 『伽婢子』卷之三・3
「牡丹灯笼」



図6 『朝鮮太平記』五之卷第四「太閤の家来岩間軍太が事並ぐん太生取る事」



図6' 『伽婢子』卷之十二・2
「幽霊書を父母につかはす」



図7 『朝鮮太平記』七之卷第二



図8 同



図9 同

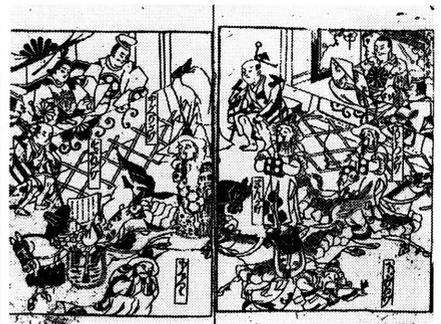


図10 同



图11 『朝鮮太平記』
一之卷第5



图12 同・二之卷第5



图13 同・六之卷第六

* 討議要旨

山下則子氏は、①『朝鮮太平記』は仮名草子を元にしてしているのか、②読本浄瑠璃は従来正徳5年の『国姓爺合戦』がきっかけで流行したと言われているが、この作品はそれ以前の刊行なので貴重である、ただ七之巻にある朝鮮通信使の図は、初版時からあったかどうか疑問がある、この種の本は長く再版され続けるので、その途中で増補されたかもしれない、と指摘・質問し、発表者は、①ほとんどは『太閤記』で、一部『伽婢子』の筋と挿絵を取り入れている、②この前後、挿絵入りの戦記物の読本浄瑠璃は毎年正月に刊行されていて、特に『国姓爺合戦』がきっかけとは言えないのではないか、と答えた。

富士昭雄氏は、プロットは宝永2年刊・馬場信意作『朝鮮太平記』に依るところが大きいのではないか、ただしこちらには挿絵がない、『伽婢子』の影響は指摘の通りであろう、と発言した。